

2025年度 研究成果報告書

所属機関名	神戸大学大学院
申請者氏名	赤木 和重
分担者氏名	前岡良汰
研究課題名	自閉スペクトラム症児における授業スタンダードの認識

	①あなたにとって良いと思うかどうか	②あなたは守ることができそうかどうか	③不適応児童にとって良いと思うかどうか
ASD児 (N=5)	4.0	4.6	6.4
ADHD児 (N=10)	3.9	5.0	7.2
ASD・ADHD児 (N=3)	3.7	5.7	6.3
その他診断有児 (N=2)	2.5	6.0	6.5
診断無の児童 (N=3)	3.7	4.3	5.7
全体 (N=23)	3.7	5.0	6.7

授業スタンダード課題における平均点（2点（良い）～8点（良くない））

【研究の概要】

授業に関する学習規範である「授業スタンダード」が全国の小学校で導入されている。授業スタンダードの在り方を巡り、肯定的意見（例、内山、2018; 青木、2018）や否定的意見（加茂、2018; 子安、2021）等、様々な論考が提示されてきたが、共通して重大な欠陥を抱えている。それは子どもの視点が見逃されていることである。授業スタンダードの捉え方に関して、子どもの意見や考えを聞き取ることがなければ、主体としての子ども不在の大人主導による教育に陥る危険性がある。特に自閉スペクトラム症など発達障害のある児童は、授業スタンダードに適応しづらい可能性が指摘されている（赤木、2018）。そこで、実際に、彼ら／彼女らがどのように、授業スタンダードを捉えているかを把握することは重要だろう。加えて、児童が、授業スタンダードを遵守できないと感じることと、学校適応が困難であることは関連が予想される。以上より、本研究の目的は、（1）自閉・情緒学級在籍児が授業スタンダードをどのように捉えるのかを明らかにすること、（2）授業スタンダードの捉え方と学校適応感との相関を明らかにすることである。

【研究の内容及び成果の詳細】

1. 研究内容及び成果（本研究によって得られた新知見、成果等）

対象児は全員、公立小学校の自閉・情緒障害特別支援学級（以下「自閉・情緒学級」とする）に在籍し、知的障害のない児童23名（3～6年生）を対象とした。ASDのみの診断を受けた児童は5名、ADHDのみは10名、ASD・ADHD両方の診断を受けた児童は5名であった。その他の診断を受けた児童は2名、診断のない児童は3名であった。調査実施場所は、児童が在籍する小学校及び放課後等デイサービスであった。また調査形式は、質問紙を使った個別面接であった。本調査にあたっては、神戸大学研究倫理審査委員会の承認を得て行われた。

課題は2つ提示した。1つ目は、授業スタンダード課題である。前岡・赤木（2021）を参考に新たに作成した。具体的には、姿勢や机上整理に関する授業スタンダードについて、イラスト付きのお話を読んだ後、「①その決まりがあなたにとって良いと思うか」、また「②その決まりについてあなたは守ることができそうか」を尋ねた。さらにお話の続きとして、不適応児童を登場させた後、「③その児童にとって決まりが良いと思うか」を尋ねた。質問は全て4件法とし、1～4点で得点化した。2つ目は、学校適応感尺度である。学校適応感を測定するために、小学生版学校適応感尺度（山口他、2016）を用いた。なお尺度中の「クラス」という文言は、「通常学級＝交流学級」として明示した。

結果は目的に照らすと以下の2点である。1点目は、授業スタンダード課題である。3つの質問に対して、ASD児（N＝5）の平均点は、①2.0、②2.3、③3.2、ADHD児（N＝10）は、①2.0、②2.5、③3.6、ASD・ADHD両方の診断がある児童（N＝3）は、①2.0、②2.8、③3.2であった。その他診断がある児童（N＝2）の平均点は、①1.3、②3.0、③3.3、診断のない児童（N＝3）は、①1.8、②2.2、③2.8であった。調査協力参加児全体（N＝23）では、①1.9、②2.5、③3.3という結果になった。児童全体における①と③の回答に関して、対応のあるT検定を行ったところ、有意な差があることが明らかになった（ $p < .01$ ）。

2点目は、小学生版学校適応感尺度である。調査を行う際に適切でないと判断された項目を削除した関係で、改めて探索的因子分析を行ったところ、2因子が抽出され、「通常学級の学習・活動適応因子」「通常学級の身体的適応因子」と名付けた（ $\alpha = .81$ 、 $\alpha = .73$ ）。次に、授業スタンダードの捉え方と学校適応感との関連性を検討した。授業スタンダード課題について、学校適応感との相関分析を行った。その結果、「②決まりを守ることができるかどうか」という授業スタンダードの遵守項目と、通常学級の学習・活動適応因子 .673（ $p < .01$ ）、通常学級の身体的適応因子 .652（ $p < .01$ ）の両方に正の相関が認められた。

つまり、1つ目の目的に対しては、不適応児童の立場で考える方が、児童自身の立場よりも、授業スタンダードに対して否定的な捉えをすることが分かった。2つ目の目的に対しては、自閉・情緒学級在籍児は、授業スタンダードの決まりを自分が遵守できると考えることと、学校への適応感の高さに関連があった。つまり、自閉・情緒学級在籍児に対しては、不適応児童の存在を考慮しつつ、授業スタンダードへの遵守と学校適応感との関連性を意識する必要がある。

2. 今後の研究の見通し

今後については、通常学級との比較を行う必要がある。通常学級との比較を通じた分析を行うことで、自閉スペクトラム症など発達障害を含めた支援学級の子どもたち特有の捉えがより明確になるとと思われる。インクルーシブ的観点からも、支援学級に限定した議論にとどまらず、通常学級も含めた規範の在り方を問い返すことができる。

本研究では前岡・赤木（2021）を参照し、子どもの捉えを3つの観点に細分化して検討を行ったが、今後の研究では、4つ目の観点を設定する。1つ目は、授業スタンダードが「私にとって良いと思うか」という①私的評価、2つ目は、「私が守ることができそうか」という②規範遵守、3つ目は、授業スタンダードに対して困難を抱える他児がいた場合、「その児童にとって良いと思うか」という③他者視点評価である。これらに加えて4つ目に、授業スタンダードが「私にとって良いと思うけれど守れない」という④認識－行動ギャップである。自閉・情緒学級の子どもは、規範を守ろうとしているにもかかわらず守れないような自己矛盾を抱えることが、加茂（2018）の実践報告からも示唆される。私的評価が肯定的でありながら、規範遵守が困難である状態は、評価や遵守単独で扱うだけでは把握できないような質的に異なる情報を持つため、認識－行動ギャップを取り扱うことにしている。また学校適応感の関連性も合わせて調査を行う。

現在、本研究で調査を行った対象校の通常学級239名（3～6年生）に対して、管理職に同意を得た上で、集団での質問紙調査を実施し、分析を行っている。現段階で明らかになっている結果としては、自閉・情緒学級の子どもは、通常学級の子どもよりも、授業スタンダードを守れず、他者視点からも授業スタンダードを良くないと思うが、授業スタンダード自体は通常学級と同様に良い規範と見なしていた。また授業スタンダードに対して「良いと思うけれど守れない」という認識－行動ギャップも自閉・情緒学級の子どもがより強く感じていることも分かった。

また学校適応感尺度について、自閉・情緒学級の子どもが通常学級の子どもよりも、不適応感が強く、規範の守れなさや認識－行動ギャップと関連があることも分かった。つまり授業スタンダードが守れないことは、学校の適応感を損なう恐れがあるだけでなく、授業スタンダードの望ましさと実際の遵守可能性とのギャップも、不適応感につながるということが考えられる。今後さらなる分析・考察を進め、今年度中に論文化することを目指す。

3. 本年度の学会発表・論文、刊行物・著書名等（今後、発表等を予定しているものも含む。）

赤木和重・前岡良汰・加茂勇（2026）. 特別支援学級（自閉症・情緒障害）在籍児は授業スタンダードをどのように捉えるのか：学校適応感との相関 日本発達心理学会第37回大会
今年度中に心理科学研究会に論文を投稿予定